

政府に集結するも、他大隊で赤痢患者が発生し、約一カ月間待機、呉湊港のある紡績工場に行く。ここでまた一カ月過ごし、呉湊を出発し上海港に着く。三月七日に乗船し八日博多上陸。三月十一日故郷津島の自宅に帰る。

昭和十八年四月から昭和二十一年三月までの約三年間の軍隊生活は、ここに敗戦を以って終った。

新兵四十二人が第三中隊に入ったが、無事帰国出来た者はわずか十人しかない。第三中隊が浙河を出発した時の人員百六十人、戦死二十三人、戦傷病死者五十七人、行方不明七人、計八十七人。二分の一以上が死んでいる。

家族を残して満・支での戦務

栃木県 笹沼 玉三郎

大正十一（一九二二）年三月十七日、現在の矢板市で父辰吉、母ミエの三男として生まれました。父は石

工をしていたので、家業の農事は母を助けて精励しつつも郷校を卒業、傍ら戦時下の青年学校に通い、軍事教育を受けつつ心身を鍛錬し、来るべき出征の日に備えていました。また、青年団、消防団にも入団し、交友と銃後の支援活動に従事中の昭和十七（一九四二）年の徴兵検査で、身長一六三センチ、体重六〇キロで甲種合格でした。

父は大正元年兵で、宇都宮の歩兵第五十九連隊第三中隊に入り軍務に励んでいた体験がありますし、なかなかの暴れん坊であつたらしく、軍隊のことについては日々話を聞き、それが入営後にも大要役立つと思えます。

昭和十八年三月一日、福島県の会津若松の歩兵第二十四連隊に入営となりましたが、その連隊は留守隊というか、補充隊であつたのでしょうか。昭和十八年の初期というとだんだんに緒戦の「戦勝、戦勝」の時とは違い、連合軍の攻勢も盛んとなったのか、制空・制海権は敵に握られつつあつたようです。しかし、初年兵たる我々には戦争の大勢など知る由もありませんでし

た。

会津の連隊には入営以来約一カ月いたのですが、その間は体力の錬成というか、体操、駆け足とかが主でした。一カ月後、下関を出帆し、玄界灘を渡り釜山大陸、鉄道に乗りましたが日本と違いレールは広軌道でした。北上を続け、着いたところは鮮満国境で、張鼓峯事件のあった所に近い、満州国の琿春でした。

我々が編入された部隊は、満州国の琿春、関東軍の満州第七二八部隊という部隊でした。部隊では国境でもあり、朝、ソ連に対し備えるため陣地構築をしていまして、戦地が初めての我々には、何か緊迫した空気が周囲に漂っていました。

琿春は、五十メートルほどの塹があり、その下に下河辺師団長の一個師団が戦備を固めていったということとを聞きました。私は内地の原隊でも重機関隊でしたから、陣地構築の作業には参加せず、いざという時の備えのため、陣地に配備されました。

昭和十九年三月、中支派遣軍の第十一軍、呂集団の

中に編入されました。山海関から南下し揚子江渡河、本部は応城、我々の第三大隊、第三機関銃中隊は安陸という所に配備されました。大隊長は二・二六事件関係の将校で、再召集されて来た人でした。

付近の敵は、蒋介石軍と共産八路軍の両方がおり、治安討伐をしていましたが、出先の分哨や陣地に夜襲をかけてきます。連日、生死紙一重の激しい戦闘の連続でした。陣地交替の夜、一分哨が狙われ襲撃を食ったこともしばしばありましたので、分哨の人数は少なくも、砲も配備されていました。陣地はトーチカではなく、人の肩の高さぐらいに掘った散兵壕があり、周囲は有刺鉄線を張り巡らせ、小屋に寝泊まりをしていました。

隊の出身者は当初、第十四師団系の人が多かったのですが、応城はだんだんと混成となり、満州の虎林、虎頭の人が集まってきたようでした。また、北関東ばかりではなく、東北、関西の人もいました。我々第三大隊は先程申したように安陸で警備をしていましたが、機関銃中隊には、九二式重機関銃が四銃、九二式

大隊砲、そして対戦車砲として自動砲もありましたが、音は大きい、口径が小さいため使わなくなったようでした。

我が隊が揚子江河畔の堤防上をパトロールしていた時、対岸から撃たれたので、分隊長が、重機関銃を扣いて上り、対岸の歩哨を撃ちました。それに對抗して敵も射撃を始め、敵の多くの銃眼を発見出来たので今度はこちらから機関銃を撃つ、敵も応射。江を挟んでの激しい射撃戦の展開でした。河岸は砂浜なので弾着の度に砂が飛ぶのです。しかし、壕を補強のため掘っていたらマムシがたくさんいて、かまれたら大変ですから、敵弾より壕内の毒マムシを警戒しなければならぬこともありました。

地域の中国住民と我々警備隊との関係は良く、彼らは日本軍がいるので治安が保たれ安心していたようです。中国軍も蔣介石の正規軍、共産八路軍、昔の軍閥軍が崩れた雑軍、あるいは無頼の者もいたのかもしれませんが。しかし、日本軍がいれば自然と治安が保たれ

ていたようでした。それだけに、中国軍に対しては油断なく對抗し、作戦、討伐を行わなければならなかったでしょう。

そのようなことで治安維持には力を注いでいたためか、住民と警備隊との関係は良く、「日本軍がいるから安心して」と言っていました。私が分哨にいる時、結婚式に呼ばれ出席したこともありましたが、匪賊が出て、花嫁さんが略奪されることもあったらしく、我々は護衛のための結婚式招待だったのかもしれない。しかし、それだけ日本の警備隊を信頼していたのです。

我々の分哨は分隊長以下十人以上いて、分哨内の人間関係は良かったのです。とにかく本隊から離れて敵中での勤務ですから、分哨内の団結が良くなければならぬし、ちょっとした油断も許されず、しかし、対住民関係は威嚇や弾圧だけでは駄目なので、硬軟あわせての日々であり、分哨長の任務も重かったのです。と言うのも、陣地内に砲や機関銃はあっても、十人余の人員での単独勤務でしたから。私は分哨勤務の他にも小

隊長の伝令を一年間やりましたが、神戸の銀行の偉いさんとかで温和な方でした。

昭和二十年になると、大作戦も始まったり、連合軍の攻勢、特に空襲が盛んになり、P 57、P 38などの米軍戦闘機や、双発の銃爆撃機の銃爆撃も盛んになり、敵は地上の蒋介石軍、共産八路軍ばかりでなく、空中からの米軍機となって、戦況はだんだんと悪化しているような空気になったのを肌で感じるようになりました。

その頃、私は南京で対戦車の破甲爆雷の教育を二カ月間受けました。毎日のように通称「亀の子」と呼ばれる破甲爆雷を戦車の壁面に見立てて仮装戦車に付けます。これは米軍の上陸を想定してか、対米軍戦闘の教育のための「特攻教育」であり、その教育を中隊で一人、私が選ばれて南京へ受けに行ったのです。さらには米軍の大型戦車（五〇トン戦車）の教育も受けました。日本には中型戦車しかありません。日本では大型戦車は、橋もトンネルも通れないが、欧米は大陸で

すから大型戦車があるので、その教育も受けました。米軍が中国大陸に上陸するのを想定しての「にわか教育」でした。

教育を終わり原隊に帰り、中隊でも「対戦車特攻教育」をしました。しかし、それを実施する機会もなくなり、逆に言えば幸いであったのかもしれない。

八月十五日、ポツダム宣言受諾という、訳のわからぬことで停戦になり、周囲の中国人の態度が悪化するようになりましたが、「日本が敗戦した」など信ずることが出来ず、相当の期間ショックは消えませんでした。負けたことのない日本軍ですから、日本には帰れないのではないか。日本の本土は、故郷の矢板は、父母は……など、随分長期間不安を取り除くことは出来ませんでした。

しかし、我が部隊は駐屯地にいたので、戦後聞いた作戦中の部隊よりは良かったのだと分かりました。連合軍からの使役はなく、食料の労苦はあまり無かったのは、南方の島々やシベリア抑留などと比べれば幸いであつたのです。これも長い期間治安維持に力を注い

で、対任民軍紀に守られ、住民との関係も良く保っていた功だと思えます。

武装解除は安陸でありましたが、三八式銃の菊の御紋章を削るのに苦労したり、辛い思いをした一般歩兵の話の聞きますが、我々重機関銃隊も銃、砲を中国軍に渡すため、手入れをしていたときの複雑な気持ち、「命より大切にせよ」と先輩から言われていた重機関銃や砲を、今まで戦った中国軍に渡さねばならぬと思ったときの気持ちは忘れられません。

安陸地区から上海までの間、無蓋貨車に乗った我々は、子供たちに石を投げられたり、罵倒されたりしました。また、列車は、運転手や駅員に何か渡さぬと動かしてくれず、停車中にも、まだ投石、罵倒です。この時、敗戦という悲しみと憤りを感じました。戦いに負ければこうなるのかと思ひ知らされました。昭和二十一年によく故郷へ帰ることが出来ませんでした。私は十七歳で結婚し、妻は十六歳でした。長男、長女が出征中に生まれましたが、長女が川で溺れ、そ

れを風呂に入れたので肺に水が入ってしまい、一週間で死んでしまったのでした。

留守中、父は石工であったので、妻は母を助けて農業をやっていました。復員した日、家の者は皆田圃へ行っていて留守でした。長男と初めて会ったので、当然のことながら長男は私の顔を見て「どこの人か」と、父である私に分かりませんでした。

復員してからも、父は石工を続けて、茨城の御影石を扱ったり、河川の堤防の石積みをしていました。私は農業を継いで六十歳まで働きましたが、父も八十歳まで働いていましたので石工の仕事もしました。

私は戦地では命拾いをしたのですが、家族運は良い方でなく、長男は癌で死亡、嫁は交通事故のため十三年間半身不随となってしまいました。

それでも、戦後の食料不足で都会の人は苦勞をしていましたが、私は小作地の農地解放もあり、耕作をしたり、椎茸の栽培もしたりして生活はだんだんと良くなっていきました。その陰には妻が出征軍人の留守宅を守り、銃後婦人の努力をしてくれたからです。幸い

に孫達は二男は土建業、三男は私の近所に家を建てて勤め人として家庭を築いています。これからの人生は、地域のために尽くしたり、家庭を見守ったり亡くなった戦友たちの冥福を祈ったりの日々であります。

歩兵第一二〇連隊

中支戦線幾山越えて

岐阜県 大門 久太郎

大正十（一九二一）年四月二十四日、古城郡旧細江村の農家に生まれ、学校を卒業後は名古屋へ行き、南区の岡村工業という軍需工場に勤めていました。昭和十六（一九四一）年徴集兵の検査がありました。第二乙種となりましたが、現役兵より少し遅れて、昭和十七年四月十日 教育召集を受け鯖江の連隊に入隊し、機関銃隊で自動砲の教育を受けました。文字通りの三カ月間で教育が終了して召集解除となり家に帰ることが出来ました。営門を出る前、また召集されるぞ、と言われ

ていました。

まさにその言葉通り、今度は臨時召集令状を受けました。七月、今度は京都府の福知山の歩兵第一二〇連隊留守隊に召集でした。佐世保で貨物船に乗船しましたが、話に聞いた船倉の蚕棚状の居住区に全員入れられ、体を十分伸ばすことの出来ない輸送船です。上海で揚子江を遡り、漢口に上陸したのは、たしか七月下旬の暑い日でした。「雀が熱い屋根から焼鳥になって落ちてくる」という、嘘のような本当の話を実感したのはこの時でした。

部隊は嵐第六二一二部隊で、揚子江下流の安慶にあり第二大隊第二機関銃中隊に配属され、九二式重機銃の教育を約三カ月受けました。四人搬送での訓練は厳しいものでした。関西の人が多く、私は名古屋で勤めていましたし、飛驒の出身でしたから、内務班での教育も厳しいものでした。私は銃手なので、教育中は実弾射撃も自分でやりました。

その後、作戦、討伐、警備などの勤務をしていましたが、昭和十八年十一月に大きな作戦が始まりました。